

事業区分 実践研究事業

事業名 阿蘇山一周100kmチャレンジキャンプ ～大草原からの贈り物～

- [主催] 国立阿蘇青少年交流の家
- [後援] 熊本県教育委員会 阿蘇郡市教育委員会
- [期日] 令和3年8月8日(日)～8月14日(土)
※ 事前説明会 令和3年8月1日(日)10:00～12:00
- [活動場所] 国立阿蘇青少年交流の家 阿蘇市、南阿蘇村
- [参加者] 24名(小学生16名、中学生8名)
- [協力団体] 南阿蘇ファームキャンプ【夕食食事プログラム】
- [担当職員] 6名
- [ボランティア] 3名 他 熊本大学研究生2名 神奈川大学実習生2名

1 趣 旨

自然環境に恵まれた「阿蘇」の大地をフィールドとした長距離ハイキング等を通して、同じ目的をもった仲間とともに困難に挑戦し、最後までやり遂げる力を育むとともに他者への思いやりや積極性などの自立的行動習慣を身につける。

2 目 標

- (1)参加者の8割が最後までやり遂げる力が身についたと答える。
- (2)参加者の8割が友達と仲良くなり、思いやりをもった行動ができたと答える。

3 事業展開

研修プログラム

期日	行 程							宿泊場所	
Day1 8/8 Sun	第1話「阿蘇始まりの地へ」							累計9.5km	
	9:30	10:00	10:30	12:00	14:30	16:00	21:30	交流の家 体育館	
	受付	開会式	交流の家	阿蘇神社	国造神社	入浴 夕食	就寝		
Day2 8/9 Mon	第2話「大観峰での誓い」							累計25.8km	
	4:30	9:30	11:00		16:30	17:00	21:30	交流の家 体育館	
	起床	大観峰	木落牧野入口		国造神社	入浴 夕食	就寝		
Day3 8/10 Tue	第3話「立野からのメッセージ」							累計51.1km	
	4:30	6:00	11:00		17:00	17:00	21:30	米塚 下園地	
	起床	ふれあい水辺公園	どこ湯		米塚下園地	入浴 夕食	就寝		
Day4 8/11 Wed	第4話「VS 阿蘇五岳」							累計70.0km	
	4:30	5:30	10:00		16:00	17:00	21:30	交流の家 体育館	
	起床	米塚下園地	草千里		温泉センター瑠璃	入浴 夕食	就寝		
Day5 8/12 Thu	第5話「澄んだ水のように」							累計82.0km	
	4:30	9:00	11:00	15:00	17:00		21:30	交流の家 体育館	
	起床	ふれあい水辺公園	小嵐山	交流の家を歩く		入浴 夕食	就寝		
Day6 8/13 Fri	第6話「最後の難関」							累計100.0km	
	4:30	5:30				16:30	17:30	22:30	交流の家 体育館
	起床	交流の家を歩く				夕食 入浴	就寝		
Day7 8/14 Sat	最終話「大草原からの贈り物」							累計100.0km	
	6:30	8:30	10:00	11:00					
	起床	片付け	閉会式	解散					

※ 計画では、全て野外での宿泊、阿蘇を一周するルートであったが、悪天候のため予定を変更し上記のような形での実施となった



【大草原を歩く(2日目)】



【唯一の野営(3日目)】



【ずぶ濡れのゴール(4日目)】



【100kmまであと・・・(6日目)】



【感動のゴール(6日目)】



【踏破証もらったよ(7日目)】

4 成果と課題

(1) 成果

- 「大雨、台風、寒さ、暑さの中であきらめずに最後まで歩くことができた」「1日目は100km歩けるか不安で、2日目の雨であきらめかけたけど、チームで支え合いながら最後までがんばろうと思った」「一人でつらいときにみんなが応援してくれて歩けた」「歩いているうちに楽しくなっていた」「強い気持ちがあり、ともに歩く仲間がいたから」など、最後までやり遂げる力については19名(79%)が「身についた」、5名(21%)が「だいたい身についた」と答え、あきらめずに挑戦する力が身につくとともに、仲間の大切さを味わわせることができた。
- 「きついときも支え合えた」「テントの中やご飯で仲良くなれた」「最初はいちゃくちゃになったりしたけど、今はまとまっている」など、友達については22名(92%)が「仲良くなれた」と答え、一人ひとりにとってかけがえのない友達との出会いの場を設定することができた。
- 「みんなの歩くペースを考えて歩けた」「初めは自己中心的な面が多かったけど、自分もみんなも後半、周りのことを考えていろいろ決めることができた。だけど、まだまだだと思うからこれからも成長していきたい」など、思いやりのある行動については16名(67%)が「できた」、6名(25%)が「だいたいできた」と答え、集団歩行の中で思いやりをもった行動についても身につけていることがうかがえた。
- 救護スタッフと連携を取りながら、医学的根拠を基に安全管理を徹底することで、24名全ての参加者が無事に最後のゴールをむかえることができた。

(2) 課題

- 友達については1名が「あまり仲良くなれなかった」、思いやりのある行動については2名が「あまりできなかった」と答えていたため、班付きリーダーがチームを意識した言動ができるよう、アドバイスや設定をする必要があった。例えば、スタッフの判断ではまだ歩ける場合でも「救護車に乗りたい」という人が出た時に、チームで話し合いをもつようにする等の工夫が必要だったと思う。
- スタッフの役割分担を日によって入れ替えたことで、日毎に役割が変わってしまい、対応が遅れることがあった。移動時の車の分担は変更しつつも、移動しないときを含め大きな枠で「参加者(ボランティア)担当」「安全管理担当」「運搬担当」などと明確にしておく必要があった。
- 天候により予定していたスケジュールから変更することが多々あった。無線も一人1台というわけがないため、食事の時間や活動前にスタッフで集合し、情報共有する場を多く設定する必要があった。

※ 今後、熊本大学教育学部と協働しながら、「長期自然体験活動における子供と保護者の変容」についてまとめていく。